2024年11月

民際協力ニュース

パルシック ニュース VOL.45

パルシック PARC Inter-peoples' Cooperation

復興の道半ばに発生した豪雨～能登被災者支援～

2024年9月21日～22日にかけて、奥能登地域を記録的豪雨が襲いました。1月に発生した地震からの復旧・復興も進まない中、地震の影響で緩んだ地盤に大雨が降り、より大きな被害をもたらしたと言われています。パルシックは、発災翌日に、他団体と連携し、物資配布と炊き出しのため輪島市町野町へ向かいました。町の中に入っていくと、流木が道路に流れ込み塞がっていた道が車1台通れるよう開通し、移動を待つ車両の列ができていました。停電や断水が発生し、自衛隊の車両や災害支援車両が通る光景は、まるで8か月前に戻ったかのよう。「どうしてまた能登なの……？」とやるせない思いがこみ上げてきました。これまで、能登の皆さんが自分たちの暮らしを取り戻すために積み上げてきたことすべてが、雨に流され振り出しに戻されたような気持ちになりました。

しかし、翌日物資配布のため輪島市河井町にある重蔵神社に向かい、決してそうではないことに気づきました。重蔵神社は、震災直後から地元のボランティアの方たちが物資配付を行っていて、4月からパルシックも週に1度、運営を担ってきた場所です。河井町には、氾濫した河原田川から濁流が流れ込み、川沿いの店や住居に床上浸水など大きな被害が発生しました。しかし、幸いにも重蔵神社に直接的な被害はなく、発災当日から支援を呼び掛け、日本全国から支援物資が届いていました。また、これまで重蔵神社のボランティアに関わってきた方が改めて県内外から訪れ、さらに、新たにボランティアに加わる人もいます。これまでにできた繋がりや支援の輪はなくなることはなく、むしろ広がっていると感じました。

ただ一方で、圧倒的に人の手やサポートが足りていません。浸水した家屋の片付けは人手がかかります。「能登のことを忘れないでほしい」―豪雨の前から、私たちは能登の方によく言われてきました。一人でも多くの方にボランティアに来てもらえるとうれしいのが現状です。でも、たとえ来ることが難しくても「能登に気持ちを寄せ続けること」。それこそが、二度の災害に見舞われた能登が、今いちばん求めていることだと感じています。

（パルシック能登事務所　小栗清香）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

上：輪島市町野町。流木が脇道に寄せられた道路　**下**：全国から寄せられた物資は、保管用のテントに入りきらないほど集まった　**右**：輪島市河井町。床上浸水した家屋の片付けの様子

目次

能登　復興の道半ばに発生した豪雨～能登被災者支援～…… 1
東ティモール　インドネシアで学んだ花づくり／**ミャンマー**　新たな避難民、洪水被災者への支援…… 2
レバノン　子どもたちの過酷な生活を支える心のケア／**シリア**　今シーズンの糧を来年につなげたい…… 3
パレスチナ　ガザ　不屈の精神で飼育を続ける羊農家／**ヨルダン川西岸**　セルフィート県ヤスーフ村での憩いの場作り…… 4
みんかふぇ　多様なイベント開催で進む、地域の交流／**民際教育**　2024年夏　マレーシア・フィールドワークの開催…… 5
フェアトレード　スリランカ　ネパールでのコンポスト研修に参加／東ティモール　持続可能なコーヒー生産のために／レバノン南部のオリーブ生産者…… 6／フェアトレード 日々のこと／東ティモールコーヒーツアー開催しました！／ちょっと寄り道♪フェアトレードな人びと…… 7
パルシックからのお知らせ　パレスチナ駐在員帰国イベント「ガザの声を伝えて」／遺贈寄付の受付を始めました／寄付・会員募集…… 8

東ティモール　インドネシアで学んだ花づくり

2023年3月から開始した「女性の生計向上を通じた子どもの栄養改善事業」では、女性の生計向上を目指し、花卉栽培に取り組んでいます。事業の途中で政権が変わり、輸入規則が変更になったことから、インドネシアからの苗の輸入を一時中断していましたが、ようやく1年ぶりに輸入が再開でき、活動地であるアイレウ県、アイナロ県、エルメラ県の女性グループは、切り花や母株とするための栽培を開始しています。

9月末からの1週間は、3県から代表者5名を選び、インドネシアのスマランに派遣して花卉栽培研修を実施しました。

有機堆肥について学ぶ女性たち

研修場所は、地域で花づくりを盛り上げようと奮闘している「プスピタ・クリサンティムン」という農場です。1年前にここでの花卉栽培を視察したことが縁で、今回再び訪れました。研修では畑の整備や土づくりに関する知識の習得、3種類の花（キク、宿根アスター、バラ）の栽培方法、栽培計画から経営分析まで多岐にわたる新しい技術を、実地での体験型で日々学びました。スタッフの皆さんが熱心に惜しみなく技術を教えてくれ、東ティモールからの参加者も遠慮なくたくさんの質問をすることができました。今回の研修の成果が実を結び、より良い品質のお花が栽培されることを期待しています。

（林知美）

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

サラさん
（エルメラ県女性グループ）

研修場所の温室に入り、自分の畑の花とはまったく生育状況の違う背の高い立派な花を咲かせるキクに衝撃を受け、自分たちも同様の品質の花の栽培を目指すことが私のモチベーションになっています。スマランの花卉市場で売られている花々の品質を見て、市場が求める品質と品種の花を提供することではじめて収入になるという、当たり前のことがわかっていなかったと痛感しました。芽かき*などはもったいないから、としてこなかったのですが、均一の品質で花を出荷するためには必要な作業だということを再認識しました。学んだことをひとつずつ自分の畑で実践しながら、グループのメンバーへも技術を伝えていきたいと思います。

帰国後、グループメンバーへ学んだことを共有

*芽かき：不要な芽をかき取ること。大きな花を咲かせたい場合などに行う。

ミャンマー　新たな避難民、洪水被災者への支援

ミャンマーでは、2024年2月に国軍による徴兵制が始まり、8月には地域住民に武器を供与し防衛任務に就かせる自警制度が導入されました。さらに出国制限で海外への渡航が困難となり、ミャンマーの市民は国外に逃げることもできず苦境に立たされています。10月には国勢調査が行われ、調査対象に選ばれた家庭は、国外で暮らす家族や学校を中退した家族などの個人情報を答えなければなりませんでした。この国勢調査は、活動家を一掃するための情報収集活動であるとみなされています。

ミャンマー国軍は、反軍勢力に掌握された地域の奪還作戦を開始し、空爆による死傷者が増加しています。5月～7月にはパルシックの活動地域でも激しい戦闘と空爆があり、多くの市民が負傷しました。戦闘が始まる前、パルシックはボランティアによって運営される医療施設に医薬品、医療器具を配付し、無償で働く医療従事者が医療を継続できるよう、医療従事者への報酬を提供していました。公立の診療所はクーデター後に閉鎖しているため、ここが村人たちにとって唯一の医療施設となっています。戦闘に巻き込まれて負傷した多くの人びとが、治療を受けることができました。また、戦地となってしまった村から逃れた人のなかには、住む家がなく、森の中でござを敷いて暮らさざるをえない人もいます。雨期が迫っていたため、避難した人たちに雨風をしのぐブルーシートを配りました。

9月には台風11号がミャンマーを襲い、甚大な被害がでています。ミャンマー全土で100万人以上の人びとが被災しており、パルシックは、洪水の被災者200人に衛生用品を配付しました。

今やミャンマーは世界で最も非国家の武装勢力数が多く、戦闘は複雑化しています。反軍勢力と軍事政権との間の戦闘、対立だけでなく、反軍勢力間での対立もあります。市民の生活は追い込まれ、ケシ栽培を始めたり、違法薬物に手を出したりする人もいます。一刻も早い和平、そして市民からの支持のある政府が求められています。

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

上：洪水の被災者にボートに乗って支援物資を届ける　**下**：クラウドファンディングでブルーシートを配付しました。応援ありがとうございました！

レバノン　子どもたちの過酷な生活を支える心のケア

パルシックは2016年にレバノンでシリア難民支援を開始し、北東部のアルサール市で行っている教育支援は5年目を迎えました。昨年からは新たにアルイマン校に拠点を移し、近隣の難民キャンプに居住するシリア人の子どもたち（小学4～6年生）170名に公教育を提供しました。

アラビア語や算数などの授業の他に取り入れているのが、心理社会的サポートです。シリア難民の子どもたちは多くが幼少期から難民キャンプの過酷な環境の中で暮らしており、日々大きな精神的ストレスにさらされています。心理社会的サポートは1年を通じてレクリエーションやセッションの形で行われます。例えばある日のセッションでは、子どもたちは自分の内なる感情に耳を澄ませ、それを表す表情を絵に描きました。描いた絵をみんなに見せながら、自分の感情を言葉で説明し、どんな方法でその感情を表せるかを考えます。子どもたちは自分や友だちの中に様々な感情があることやそれを表すのに多様な方法があることを学び、どのようにしたら豊かな人間関係を育めるのかを考えていくのです。今年も子どもたちが安心して学習できる場を作り、困難な状況の中でもまた一歩先へ進めるよう、活動していきます。

（土橋弘）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

自分の感情を表す表情を描いた子どもたち

生徒の声

ハニーンさん（6年生）

新学期が始まった当初はほとんど話さなかったり、自分の感情を暴力で表現したりする子どもたちもいました。1年間、心理社会的サポートが提供された今では「自分に自信が持てるようになった」「自分のことをもっと表現できるようになりたい」「もっと他人のことを考えて行動したい」といった声が聞かれ、行動にも変化が見られます。ハニーンさんは「以前はイライラした気持ちを周りの人にぶつけていました。でもそれがみんなにどんな影響を与えているか分かるようになり、自分を変えることができるようになりました」と話してくれました。

追記

現在レバノンでは、南部での戦闘、中部と首都ベイルートへの爆撃の激化により、国内避難民が増加しており、アルサール市でも多数の避難者が確認されています。現時点で、安全面において、同市への直接の影響は出ていません。引き続き状況を注視しながら、関係者の安全を最優先に活動をしていきます。

シリア　今シーズンの糧を来年につなげたい

冬の訪れを前に、今期のハマー県での農業支援と小規模起業支援の活動を終えました。年間を通じて多くの課題がありましたが、それらを乗り越えて大きな成果を出すことができました。

シリアでは経済的困窮と異常気象のために農業を継続していくことが困難になっています。農業支援ではそれらに対処するための技術を導入しました。その結果、予期せぬ晩春の降雨や夏の酷暑によって小麦や夏野菜の収穫に影響が出ている中にあって、支援を受けた農家は充分な収穫を上げ、来期の農業活動の準備に必要な収入を得ることができました。

一方、小規模起業支援で課題となったのは経営についての知識でした。支援を受けて地域で小さな店を開いた人たちは、経営について学びながら、実際の店の経営もしていきました。商品が売れて収入を得ると、抱えている借金を返したり、生活に必要なものを買ったりするのに使いたくなりますが、継続的に店を経営していくには再投資も必要です。その両立は簡単なことではありません。しかしスタッフの支援と励ましにより、全員が困難を乗り越え、中には商品を当初の倍に増やした人さえいます。

これらの活動を通して、農業による食糧生産と農村の経済活性化に貢献することを目指してきました。西アジアの情勢はとても不安定ですが、支援を受けた人びとの生活は確実に改善されました。

（アンソニー／岡崎・飯村）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

今年の夏収穫したナス

人びとの声

日用雑貨店を営む ハナーディさん

夫が行方不明になって6年以上になり、夫の高齢の母親と暮らしています。私たちの村では大規模な武力紛争が起き、数年間避難していました。村に戻ってみると、家は破壊され、家具は失われており、仕事もありませんでした。以前は少量のアクセサリーや化粧品を買って村で売っていましたが、資本がなく採算が合いませんでした。いつか自分の店を持つという夢を持っていましたが、私はこの事業の中で多くの経験を積み、皆さんの支援のおかげで夢を叶えて店を開くことができました。

ハナーディさん

ガザ　不屈の精神で飼育を続ける羊農家

ガザ地区が未曽有の人道危機に陥り1年以上が経過しました。人口220万人のうち190万人が国内避難民となり、ナイロンシートやマットレスなどを寄せ集めて作った仮設テントで避難生活を続けています。死者数は、病死などの関連死も含めると推定18万6000人以上とされ、負傷者も約10万人に達しています（2024年10月9日時点）。栄養失調による免疫力の低下も相まって感染症や皮膚病などが蔓延するなか、子どもたちを中心に飢餓の危機も深刻さを増しています。ガザ地区総人口の半数は18歳以下の子どもたちです。

パルシックはこの筆舌に尽くしがたい状況の中、ガザスタッフを中心に緊急支援や生計支援を続けています。今回の戦争以前から畜産支援を行ってきた羊農家70世帯のうち、37世帯が現在でも羊の飼育を続けています。人間同様、羊も戦争中は飼料や水不足から栄養失調になり、さらには爆撃の爆音で流産が続いていましたが、羊農家が精一杯ケアをして、健康状態も回復しつつあります。2024年9月には、羊の妊娠状況を確認するための超音波検査を実施して、現在約100頭いる羊のうち、一部に妊娠が確認されました。羊農家は、自らの食料や水の確保も困難な中、これからも飼育を続けると言っています。搾った羊乳や羊を食肉用として販売することで、彼らの貴重な収入源となっています。（吉田）

エリアンさんの羊の妊娠状況を超音波検査で確認する獣医

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

女性組合の代表 ヤスミーンさん

私は6人の子の母です。パルシックが2018年から実施した「酪農を通じた女性グループの生計支援事業」に参加して、乳製品を作って販売する活動を行ってきました。私がチーズ作りを再開できたのは2024年5月です。避難中でも死守したチーズ作りの道具を使い、テントの横で料理用粉ミルクを使ってチーズ作りをはじめました。ガザの子どもたちに少しでも栄養価の高いものを食べてほしいからです。そして売上で家族を支えたいです。私はこれからも諦めません。どうか応援してください。

UNRWAの支援で受け取った粉ミルクを使ってチーズを作り、テントの住民などに販売するヤスミーンさん

ヨルダン川西岸　セルフィート県ヤスーフ村での憩いの場作り

毎年、西岸地区で行っている植樹会は、今年、セルフィート県ヤスーフ村で、放置されていた土地を整備し実施しました。当初は2月に計画していましたが、ガザへの大規模攻撃の陰で西岸地区でも治安状況が悪化し、植樹会の開催は遅れました。ヤスーフ村には、違法入植地やイスラエル軍の軍事施設があり、これまでも日常的にオリーブ畑への放火や、イスラエル軍による恣意的な道路の封鎖がありましたが、2023年10月7日以降はその頻度と激しさが増しています。そのような状況の中ですが、5月には無事に植樹会を実施することができました。オリーブ、アーモンド、クルミ、レモン、グワバ、ビワなどの果樹、バラやジャスミンなどの花、約400本を植えました。植樹会の後、村では子どもたちのためにブランコやシーソーなどの遊具も設置しました。夏には、たくさんの村人が夕涼みに訪れました。

昨年10月以降、西岸でもイスラエル軍による難民キャンプなどへの侵攻によって、5000人を超える人びとが国内避難民となっています。また、2024年7月に国際司法裁判所で国際法違反であると勧告が出されていますが、違法入植地と新しく入植地にするために接収された土地も急増しています。ガザ侵攻の即時停止とともに、イスラエルによる入植者植民地主義を終わらせるよう訴え続ける必要があります。（高橋）

レモンの苗木を植えるサールハさん

（この事業は、国土緑化機構の緑の募金の助成と皆さまからのご寄付で実施しました。）

人びとの声

ムジャヘドさん

今回のような公共の場所に植樹する事業がヤスーフで行われたのは初めてです。小さな子どもが2人いるので家族で楽しみにしていました。村はこれまでも違法入植者による暴力が度々ありましたが、昨年の10月7日以降はさらに酷くなり、子どもたちの安全に不安を感じることもあります。私のオリーブ畑は昨年10月に違法入植者に放火され、さらに今年に入ってアンズの木も根こそぎ抜かれました。このような状況ですが、村で安全に子どもを遊ばせることできる場所ができてうれしいです。

植樹会に参加したムジャヘドさん

多様なイベント開催で進む、地域の交流

コミュニティカフェみんかふぇは、東京都葛飾区白鳥地区でボランティアと一緒に居場所づくりをしています。この夏も昨年に引き続き、みんかふぇ夏祭りを開催しました。大人から子どもまで90人ほどが来店し、焼きそばやかき氷、輪投げなどを楽しみました。「屋内で日中に開催されるお祭りはうれしい」「価格がお手頃で参加しやすかった」という声をいただき、今後も定番のイベントになりそうです。

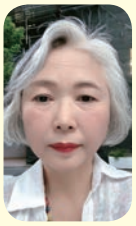
毎月の恒例になっているイベントもあります。白鳥地区から名前をとった「スワンの会」は、多文化交流イベントです。オーストラリアワインの飲み方を学んだり、風呂敷の使い方を体験したり、ボランティアの特技やアイデアを存分に活かして開催しています。社会的な話題についておしゃべりする「ピースカフェ」や、持ち寄ったお菓子を囲む「みんかふぇティータイム」は、常連メンバーがいる定番イベントです。パレスチナ駐在員が参加し、ガザについて皆で話したピースカフェでは「巷にあふれるメディアの情報や意見に飲み込まれそうになるが、こうやって自分の気持ちを言葉にして、顔を見て話すと、言葉の残り方が違い、きちんと情報を掴める気がする」との声がありました。足を運んでくれる地域の方の声に耳を傾けながら、みんかふぇが担う役割を見つめなおしています。（吉浦諒子）

（この事業は、ニッセイ財団、赤い羽根共同募金、こども未来応援基金と皆さまからのご寄付で実施しています。）

8月のスワンの会では、オーストラリア文化とワインについて学びました

人びとの声

みんかふぇボランティア 山﨑由美子さん



山﨑さん

私は、以前からコミュニティカフェに興味を持っており、ネットで検索したら、自宅近くにみんかふぇがあることを知りました。お店を訪ね、スタッフと交流を重ねました。中国に長年暮らしていたので、中国のことを日本人に伝えられたらいいなとずっと思っていました。餃子パーティーや肉まん作りのイベントを開催でき、本当に嬉しかったです。最近では、月1回のスワンの会や月2回の食材配付のお手伝いなどを通して、皆さんから元気をいただいております。私の夢を実現させてくださったスタッフの方々に感謝しています。

2024年夏　マレーシア・フィールドワークの開催

2024年8月後半から9月前半にかけて、2つの大学（清泉女子大学、京都産業大学）のマレーシア、ペナンでのフィールドワーク（以下、FW）に協力しました。

FWに参加した学生は、英語の学習だけではなく、世界の縮図はペナンにはあると講義と体験から学びました。「なぜペナン島で貿易が盛んに行われたのか」、「なぜいろいろな民族が住むようになったのか」などの講義を受けた後、残りの半日は実際にジョージタウンで街歩きをして、モスクやインド寺院、中国寺院などを訪ね、宗教や歴史について体感しながら学びました。マレー人の人たちが住む漁村に民泊をし、現地の人と同じように手で食事を食べ、漁村の環境問題を知ることもできました。

帰国後、清泉女子大学で開催された報告会では「日本でこれまでどおりの夏休みを過ごしていたらできなかったことを沢山経験できた」、「迷っているなら絶対に参加した方がいい」、「自分の国の歴史や文化を現地の学生のように話せなかった。他の国を知ることは自分の国を知ることにもつながる」と、一人ひとりが感想を話しました。積極的な参加で、短い期間に多くを学んだことが伝わってきました。（西森光子）

参加者の声

佐藤さん（清泉女子大学）

フィールドワークを通して、実際に見ることの大切さを実感しました。ペナンでは、1つの街に、モスク、教会、寺院があり、街を歩くだけでも多文化社会を目にしました。

マレーシアは多文化国家で、民族がいつも混ざりあって生活していると思っていましたが、民族ごとのコミュニティも確立していることが分かりました。また、人びとの優しさや料理の美味しさ、自然の魅力に触れ、日本では経験できないような貴重な体験ができ、視野の拡大に繋がりました。

最終発表をする佐藤さん

ホームステイ先の家族との集合写真

from Sri Lanka

ネパールでのコンポスト研修に参加

2024年6月から、JICA草の根技術協力事業で、スリランカ南部デニヤヤの有機紅茶の生産性と農家の収入を上げるための事業を開始しました。生産性を上げるための取り組みの一つとして、堆肥の品質の改善や施肥の量、施肥の仕方を変える必要があり、2024年9月末に、良質の堆肥作りとその企業化に成功しているネパールの「リキシコンポスト」を訪問し、デニヤヤ小規模紅茶農家グループ「エクサ」に参加する農家3名とパルシックのスタッフ1名が堆肥作りについて学びました。

リキシコンポストの堆肥舎の前で

4日間の研修では、良質な堆肥を作るために必要な成分やバクテリアの役割などについて座学で学んだ後、実習で堆肥作りを体験しました。堆肥舎には、発酵途上や発酵を終えた堆肥が積まれていましたが、嫌なにおいがなく、堆肥舎のイメージを変えるものでした。また、堆肥を使用している農家を訪問し、お話を聞きました。「堆肥に変えたことで花の生育速度が速くなった」という話や「1年前に堆肥を使い始め、生育スピード、病害虫、収穫量に効果があると感じている」という声を聞きました。実際に農家が使い、その効果を実感していることが分かり、研修に参加した農家は、口々に「デニヤヤでもぜひ試してみたい」と話していました。これからエクサの有機農家と新たな実践を始めていきます。

from Timor Leste

持続可能なコーヒー生産のために

東ティモール産コーヒーは、例年6月下旬～8月下旬が収穫期ですが、今年は天候不順により、大幅に遅れています。7月に出張で訪れた産地では、通常なら赤く熟した実が一面に広がるはずの畑が、緑色の実ばかりで埋め尽くされていました。10月15日現在、収穫はまだ続いています。

20年以上コーヒー生産者と活動してきたスタッフも「こんなに収穫時期が遅れるのは初めて」と話すほど、異常な天候が続いています。一本の木に花、緑の実、赤く熟した実が同時に見られ、植物の力強さと気候変動の影響を目の当たりにしました。

生産者たちは、収入減を心配しながらも、5年前から取り組んでいるコーヒーの木の若返り事業で植え替えたが実をつけ始めたことに、希望を見出しています。

マウンレテ集落カルロスさんの雨対策の乾燥台

コーヒー改善事業で植えた木に実。
マウンレテ集落エドワルドさん

from Lebanon

レバノン南部のオリーブ生産者

2023年秋から2024年春にかけて、ParMarcheで限定販売した「マウント・ヘルモン　エキストラバージンオリーブオイル」。その産地のレバノン南部ハスバヤ地域は、今、戦火に包まれています。生産者の皆さんの無事は確認ができて安堵していますが、経済危機に苦しむ中で紛争に巻き込まれ、避難を余儀なくされている状況に心を痛めています。特に、オリーブの収穫期を迎える10月に紛争が激化したことは、生産者にとって大きな打撃となっているはずです。彼らの落胆、恐怖、そして怒りを思うと、言葉もありません。一日も早く平和が訪れ、生産者の皆さんがオリーブ栽培を再開できることを心から願っています。

昨年のオリーブ収穫期のハスバヤの畑

パルシックのフェアトレード

パルシックのミッション「人と人が助け合い、支え合い、人間的で対等な関係を築く」という考えをもとに、フェアトレード事業では、商品の生産や流通、消費が市場の価値だけに依存するのではなく「人間的な交流と信用に基づくフェアな取引」を大切にしています。

Par Marche

オンラインショップ
https://parmarche.com

フェアトレード　日々のこと

気候変動によって年々増える大雨災害、予期せぬ地震の発生、紛争の勃発など、国内外での私たち市民同士のつながり合い、支え合いが、これまで以上に大切になっています。

民際協力、フェアトレード、民際教育の3本柱で活動を展開するパルシックは、この間、各事業がそれぞれに展開するのみならず、事業と事業とが連携をとることで生まれる、より大きなインパクトを目指して取り組んでいます。

パレスチナ ガザ地区では2023年10月7日の紛争ぼっ発から停戦がなされないまま、1年が経ちました。10月～11月にかけて、フェアトレード商品でつながるお客さまがガザ支援のために各地でイベントを主催してくださったり、情報発信をしてくださったりして、支援の輪が大きく広がりました。能登半島の現場へも緊急物資を持って駆けつけたり、お客さまの店舗で寄付を集めたりして支援にご協力くださいました。

フェアトレードでつながりがあった「NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝」のみなさんが開催してくださったパレスチナ報告会

普段、フェアトレード部とお客さまとのコミュニケーションは、商品や産地にまつわることが中心となりますが、フェアトレードが持つ連帯の底力を民際協力の現場に還元することで、日本の市民のより大きな声として広めていけることを実感しています。

東ティモール コーヒーツアー 開催しました！

クロロ集落でコーヒーチェリーの選別をする参加者

2024年8月4日（木）～8月11日（木）の8日間、東ティモール「美味しいコーヒーに出会う旅」を開催しました。8名の参加者の皆さんとともに首都ディリから山奥のコーヒー産地マウベシのクロロ集落とリタ集落を訪問しました。コーヒーを普段あまり飲まない方から数十年コーヒー業界に携わっているプロまで、10代の学生から60代の幅広い方々に参加していただきました。

東ティモールで生産者の方たちと出会い交流し、子どもたちと遊び、様々なことを学びました。東ティモールの満天の星の大自然の下、参加者の皆さんが有意義な時間を過ごせたことを願います。

ちょっと寄り道♪ フェアトレードな人びと

ここ数年、年間通してパルシック商品を学内で販売してくださるのが、静岡雙葉中学・高校の生徒会の国際教育支援有志活動「フォスターフレンド」の皆さんです。9月の文化祭では45名ほどのメンバーが交代で販売を担当し、2日間でリキッドコーヒー150本を販売するくらい活気あふれるグループです。

フォスターフレンドは、海外の金銭的支援が必要な子どもたちへ、その友人として里親的な役割を担うことを目的とし、エクアドルと東ティモールへ教育資金を送金しています。

もともと雙葉学園は、1621年、北フランスで生まれた創立者ニコラバレ神父が、貧しい子どもたちに教育を提供するために設立した「幼きイエス会」が礎となっており、その精神が、現在も教職員や生徒たちに受け継がれているのです。

パルシック商品を扱うことになった経緯は、東ティモールの子どもたちとの文通がきっかけだったとのこと。今では東ティモールのコーヒー、ハーブティーだけでなく、スリランカのアールグレイ紅茶を求めて、販売会に来て下さる方もいるそうです。商品を通して現地のことを知っていただく機会が今後も増えることを願っています。

雙葉祭で販売を担当したフォスターフレンドのメンバーたち。商品がとても手に取りやすくきれいに並んでいます

学校として、学校説明会での販売会にも取り組んでおられ、これからこの学校に入学を考えるお子さんや保護者にとって、先輩となる生徒さんがいきいきと商品説明する姿は好印象を与えているそうです。ぜひわが校でも！というお声をお待ちしています。

イベントレポート　パレスチナ駐在員帰国イベント「ガザの声を伝えて」

2024年10月、パレスチナ・ガザ地区の戦闘・未曾有の人道危機が始まって1年が過ぎました。ちょうどこのタイミングで一時帰国した2名のパレスチナ駐在員が、これまでおもにフェアトレードでつながりのあった方たちにお招きいただき、日本各地でお話しする機会を得ました。

駐在員は、普段はヨルダン川西岸地区に駐在していますが、ガザ地区にいる現地スタッフから、戦闘が始まって以来「どうか日本の人たちに伝えてほしい」と毎日のようにメッセージや写真を受け取ってきました。

戦禍のなか、毎日を必死に生きるガザの人たちの姿に、参加した人たちからは「ニュースでは、ガザ全域が瓦礫になっていて無力感があったが、報告を聞いて、壊滅的な状況の中でも人びとが様々な工夫を凝らして生活をしていることを知り、わずかでも希望を抱くことができた。また、同じ生活者としての顔が知れて身近な存在に感じることができた」といった感想をいただきました。

パルシックは昨年12月より、パレスチナに様々な形で関わる方たちを講師にお招きして「パレスチナ連続講座」を開催しています。複雑とされるパレスチナ問題について学ぶ機会を持つこと、それと同時にガザの声を伝えていくこと、こうして少しでも多くの人にパレスチナに関心を持ち続けてもらえればと考えています。

パレスチナ駐在員帰国関連イベント

10月　5日	「停戦を、今すぐに。」人道支援NGOからの声明・キャンドルアクション＠東京
10月　7日	みんかふぇ「ピースカフェ」＠東京
10月11日	ガザの人びとの思いを伝えて～パレスチナ駐在員が語る未曾有の人道危機から一年～＠大阪
10月12日	ガザの声を伝えて～パレスチナ駐在員が語る10.7から一年～＠大阪
10月17日	伝えたいパレスチナの人びとのこと　考えたい私たちにできること～パレスチナ駐在員が見たパレスチナの今～＠北海道
10月23日	パレスチナ・ガザの人々の暮らし～なぜ暮らしは壊されているのか～＠大阪
10月26日	ガザで何が起こっているのか＠愛知
11月　6日	停戦を、いますぐに。～パレスチナ駐在員が語る未曾有の人道危機から一年～＠愛知

10月5日、東京の増上寺で行われたキャンドルアクション

〈パレスチナ連続講座〉は、パルシック YouTubeチャンネルでアーカイブ配信しています！

パレスチナ Instagram アカウントができました
パルシック パレスチナ @parcicpalestine

皆さまのご支援によって支えられています

遺贈寄付の受付を始めました

大切なご遺産を未来へ繋げる「遺贈寄付」をお受けしています。少額のご寄付、活動地やプロジェクトを指定したご寄付も承っております。まずはお気軽にご相談ください。

▶**遺贈によるご寄付**
遺言によるご自身の遺産からのご寄付。
▶**相続財産からのご寄付**
相続人もしくは受遺者の相続財産からのご寄付。
▶**お香典返しによるご寄付**
お香典やお花料へのお返しに代えてのご寄付。

遺贈寄付の詳細については、パルシックのホームページをご覧ください。
https://www.parcic.org/support/izokifu.html

パルシック会員募集

パルシックの趣旨に賛同し、総会等を通じてパルシックの活動に参加していただける会員、賛助会員を募集しています。

年会費
会　　員：10,000円
賛助会員：20,000円

※入会ご希望の方は、Webサイトよりご連絡ください。

あなたの寄付でパルシックの活動を支えてください。

みなさまの温かいご寄付をお待ちしています。活動地を選んで、「今回のみ」、「毎月（サポーター）」を選んでご寄付いただけます。詳細は、パルシックの Webサイトをご覧ください。

※パルシックは認定NPO法人です。パルシックへのご寄付・サポーター費は、確定申告によって所得税、法人税、相続税などの寄付金控除を受けることができます。

寄付ページ
QRコード

●**クレジットカードでの寄付**　Webサイトよりお手続きいただけます。
●**郵便局からの寄付**　郵便振替口座：00140-8-536957　口座名義：パルシック
●**銀行からの寄付**　三井住友銀行　神田支店（普）2384136　口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、ご住所とお名前をご一報ください。

民際協力ニュースは年に2回（6月・11月）にパルシックが発行するニュースレターです。送付の希望、送付先の変更、送付の停止については、office@parcic.org までご連絡ください。

民際協力ニュース　VOL.45
2024年11月

特定非営利活動法人 **パルシック**（認定NPO法人）
〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11
東洋ビル1F
電　話：03-3253-8990　Fax：03-6206-8906
メール：office@parcic.org
Web：https://www.parcic.org

オンラインショップ ParMarche（パルマルシェ）
https://parmarche.com
X　@parcic_office　@parcic_ft
facebook　@parcic
Instagram　@parcic_tokyo　@parcicpalestine
YouTube　@ParcicChannel